項目反応理論を用いたソーシャルスキル自己評定尺度短縮版の 作成と青年への適用の検討

○吉良悠吾^{1,2}・尾形明子¹・上手由香¹

(¹広島大学大学院教育学研究科・²向洋こどもクリニック)

キーワード: ソーシャルスキル・青年・項目反応理論

Development of a Short Form Social Skills Self-Rating Scale for Japanese using item response theory
and investigation of application to adolescents

Yugo KIRA^{1,2}, Akiko OGATA¹ and Yuka KAMITE¹

(¹Graduate School of Education, Hiroshima Univ., ²Mukainada Child Clinic)

Key Words: social skills, adolescent, item response theory

目 的

ソーシャルスキルは、どのように人と関わるかといった行動の側面だけでなく、対人行動の発現を可能にする認知過程も包含する概念である(相川, 2009)。青年期は、互いの個性を認め合いながらも、自分の言いたいことをはっきりと伝える意欲が高い時期であるため(榎本, 2000)、認知過程におけるスキルも重要になると考えられる。

これまでのソーシャルスキル研究では、それぞれの年代ごとに必要と考えられるスキルを測定する尺度が作成されてきた(e.g. 安達, 2013)。しかし、それによって年代をまたいだソーシャルスキルの発達のな変化を捉えることや、年代間でのソーシャルスキルの高さを比較することが困難になっている。青年期の各年代の適応に共通して必要となるソーシャルスキルを同定するなど、より幅広い年代のソーシャルスキルを測定できることには一定の意義があると考えられる。

そこで本研究では、大学生対象の調査によって妥当性や信頼性が示された、多面的なソーシャルスキルを同時に測定することができる「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度」

(相川・藤田, 2005)が、青年のソーシャルスキルを同様に測定することができるかどうかを検討することを第一の目的とする。また、項目数が多くなるほど回答に時間がかかってしまうため、授業時間の一部を使っている回答が難しくなり、教育現場での実施が困難なものになってしまう。そこで本研究では、項目反応理論(item response theory: IRT)を用いて、アセスメント精度が保たれる範囲内で項目数を減らした、短縮版の作成を行うことを第二の目的とする。

方 法

調査対象者 高校生 423 名と、大学生 421 名の計 844 名のうち、有効回答が得られた高校生 373 名(男性 167 名、女性 175 名、不明 31 名; 平均年齢 15.49 歳、標準偏差 0.77)、大学生 401 名(男性 226 名、女性 171 名、不明 4 名; 平均年齢 18.79 歳、標準偏差 1.04)の計 774 名を分析対象者とした。

調査項目 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度(相川・藤田, 2005)を用いた。本尺度は、初対面の人と関係性を作るスキルである「関係開始」(8 項目)、個人が相手の意図を受け取るスキルである「解説」(8 項目)、自分の意思を相手に伝えるスキルである「主張性」(7 項目)、できあがっている関係性を維持するスキルである「関係維持」(4 項目)、コミュニケーション過程において個人内に生じる感情に対処するスキルである「感情統制」(4 項目)、汎状況的に個人が相手に自らの意思を伝えるスキルである「記号化」(4 項目)の計 6 因子構造(35 項目 4 件法)である。

結 果

高校生と大学生を母集団とする多母集団因子分析を行った。母集団ごとのモデル適合度は、高校生が GFI=.79, CFI=.81, RMSEA=.07, 大学生が GFI=.84, CFI=.86, RMSEA=.06 であった。構造と因子負荷量に等値制約を課した測定不変モデルの適合度は、GFI=.81, CFI=.83, RMSEA=.05 であった。RMSEA の値の低さや、GFI や CFI の値が測定不変モデルと大学生のモデルとでほとんど差がないことから、高校生と大学生のソーシャルスキルについて、同様の因子構造で測定可能であると判断された。そこで、以降の分析は高校生と大学生のデータを合わせて用いた。

逆転項目を全て反転した上で、IRT を用いて項目パラメータを測定した。IRT モデルは、generated response model (Samejima, 1969) を用い、項目パラメータの推定には熊谷(2009)の EasyEstGRM を用いた。ポリコリック相関係数行列を推定し、下位尺度ごとに固有値の変化を分析した結果、第 1 固有値から第 2 固有値にかけて大きく減少していたため、1 次元性が満たされていると判断された。次に、下位尺度ごとに IRT を適用した分析を行い、項目パラメータの推定を行った。その際、母集団によって項目パラメータが異なる可能性があるため、特異項目機能(Differential Item Functioning; DIF)について、EasyDIF(熊谷, 2012)を用いて、DIF の指標となる指標 K を算出した。識別力が高い項目、すでに選択された項目とは困難度ができるだけ異なる項目、母集団による項目パラメータの違いに問題がないと判断される項目、の 3 つの観点から、特性尺度値 θ の -2.00 から 2.00 の範囲における平均テスト情報量が、3.33 を大きく切らないよう項目の選定を行った。その結果、「関係開始」3 項目、「関係維持」4 項目、「主張性」3 項目、「解説」3 項目、「感情統制」4 項目、「記号化」3 項目の計 20 項目が短縮版項目として選定された。最後に、短縮版項目について、測定不変モデルを検討したところ、GFI=.90, CFI=.90, RMSEA=.05 と、十分なモデル適合度を示していた。

考 察

本研究により、青年の多面的なソーシャルスキルを簡便に測定できる、原版以上にモデル適合度の高い、「ソーシャルスキル自己評定尺度短縮版」が開発された。IRT を用いた項目の選別を行ったことで、各項目の細かな性質を捉えることができ、より精緻な尺度項目の選定を行うことができたと考えられる。また、DIF を用いたことで、母集団の違いの影響を受ける項目を除くことができたことも有効であったと考えられる。これにより、ソーシャルスキルの高校生以降の縦断的な変化の測定や、世代間での比較など、今後のソーシャルスキル研究のさらなる発展につながるだろう。